

2021 年度 第 2 回 館長講演会

日本人ってどんな人たち？

——外国人から見た過去の日本——



講師：館長 菊池 徹夫

日 時：2021 年 9 月 18 日（土）10 時 30 分～12 時 00 分

場 所：福島県文化財センター白河館（まほろん）

日本人ってどんな人たち？

——外国人から見た過去の日本——

1 日本人に注がれた眼差し

新型コロナ禍はなお猛威を振るい、感染者は今や世界で2億人を遥かに超え、死者は500万人に達しようとしています。間違いなく人類史に遺るパンデミックの様相を呈しています。世界各国それぞれのやり方でなお戦いが続けられ、特効薬がないこともあって勝敗はなかなかつきません。少なくとも人出と過密・接触は悪く、換気、うがい・手洗い、消毒それにマスクが良いのだけは間違いないようですが……。

それはともかく、世界中がそんな強敵とまさに全面戦争の最中、最初は「東北復興の証」として、次には「コロナに打ち勝った証」としてのオリンピック・パラリンピックをあえて強行した日本人は、世界の人々から、いったいどんなふうに見られていたのでしょうか？ 訪れた各国アスリートや関係者の声として伝えられたのは、なぜか市民ボランティアの方々への好印象ですが、それは、じつは幕末、明治に訪日した欧米人たちの、当時の日本人、それも庶民に抱いた印象とそっくりなのに気づかされます。

当時から日本の庶民は、「外人」に対して少しシャイで明るく、とても親切でお人好し、正直な印象を与えたようです。しかも、そういう自分たちが外国人からどう思われているか、をととても気にする人々だったことも今に通じます。

今日は、かつて日本を訪れた外国人たちが日本人をどう見ていたか、確かめてみましょう。

『魏志倭人伝』でうかがえるように、隣国、中国や朝鮮の人々は、当然、古くから日本と往来し日本人と付き合っています。また、たとえば慶長の役で日本の捕虜となり拉致され、2年間伏見城に幽閉されていた朝鮮王朝の文臣で『看羊録』を書いた姜沆の記録なども貴重ですが、ここでは戦国時代以後次第に多くなり、江戸時代を経て幕末・明治期には頻繁になった西欧人の記録を見ていくことにします。来日した彼らは、その時代や出身国、立場や職業、信仰、あるいはどこでどんな状況でどんな立場の日本人と会ったか、などの事情によって、それぞれ異なった印象を伝えているのはもちろんですが、いずれも客観的で面白い記録を残してくれています。ヨーロッパ人たちに共通する精神態度とラテン文字表記のおかげも大きいでしょう。表音文字であるアルファベットは、人名・地名をはじめ彼らの聴いたさまざまな日本語を、方言や訛りも含めて、とても正確に写してくれているからです。

なお、マルコ・ポーロの『東方見聞録』は初めて日本を西欧に紹介した書物として知られていますが、これは彼の中国（元）での伝聞によるものなので『倭人伝』同様ここでは扱いません。有名な小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）もまた、他の理由でここでは省きます。

2 戦国時代以降訪日した欧米人

フランシスコ・デ・ザビエル (1506～1552) スペイン (バスク) のカトリック宣教師

イエズス会創設メンバーの1人。

1549 (天文 18) 年、インドのゴアから初めて来日。日本に初めてキリスト教を伝える。日本人を極めて高く評価。日本人は親しみやすく、善良で悪意がないが名誉心が強い。日本人は貧弱な食生活だが達者。男色 (「衆道 しゅどう」) が公然と行われていることに驚き批判。『聖フランシスコ・デ・ザビエル書翰抄』

ルイス・フロイス (1532～1597) ポルトガルのカトリック司祭・宣教師、イエズス会士。

1563 (永禄 6) 年、長崎付近に上陸、戦国時代後期の日本で布教。信長、秀吉と会見。信長、秀吉、光秀らについて記録、欧語との比較で日本語の曖昧さを指摘。その他、衣食住、酒、仏教、武器・武具、病気、医者、薬、文字や手紙、乗り物、歌舞音曲、その他の細々した風俗・習慣についての観察・記録がある。編年体歴史書『日本史』。

フランソワ・カロ (1600～1673) フランス人ユグノー教徒、オランダに亡命。来日した最

初のフランス人。1619 (元和 5) 年、料理人としてオランダ商館に着任。1639 (寛永 16) 年～1641 (寛永 18) 年、オランダ商館第 8 代館長。日本人と子供 『日本大王国志』

エンゲルベルト・ケンペル (1651～1716) ドイツの医師・博物学者

1690 (元禄 3) 年～1692 (元禄 5) 年在日。「出島の三学者」の1人。「日本には聖職皇帝 (天皇) と世俗的皇帝 (将軍) の 2 人の支配者がいる。」 『江戸参府旅行日記』

ジョヴァンニ・バッティスタ・シドッティ (1668～1714) イタリアのカトリック司祭

1708 (宝永 5) 年、マニラから屋久島に潜入、捕らえられ江戸で幽閉。監視・世話役の老夫婦長助・はるに洗礼を施したのを咎められ、地下牢に移され 46 歳で獄死。

新井白石は彼との対話から『西洋紀聞』『采覧異言』を著している。なお、2014 年、小石川の切支丹屋敷跡で 3 体の人骨出土。DNA から本人を特定。頭部復元。

カール・ペーテル・トゥーンベリ (1743～1828) スウェーデンの植物学者・博物学者・医学

者。リンネの弟子。「出島の三学者」の1人。1775 (安永 4) ～1776 (安永 5) 年、オランダ商館付き医師として出島に赴任。1776 (安永 5) 年、商館長と共に江戸参府、家治に謁見。また蘭学者達を指導。道中、多くの植物標本を収集。『江戸参府随行記』

ヴァシーリー・ゴロヴニーン (1776～1831) ロシア帝国の海軍軍人・探検家・学者。

1811 (文化 8) 年択捉・国後で幕府役人に捕縛、箱館で幽閉、間宮林蔵と会見、日本人にロシア語を教える。1813 (文化 10) 年、ロシア側に捕らえられていた高田屋嘉兵衛らと交換で開放。日本人の長い挨拶、丁寧な辞儀、くどい世辞について。『日本幽囚記』

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (1796～1866) ドイツの医師・博物学者

1823 (文政 6) 年、オランダ商館付き医師となる。出島の 3 学者の 1 人。

1828 (文政 11) 年、日本を去る。シーボルト事件、『日本』など著書多い。

マシュー・カルブレイス・ペリー (1794～1858) アメリカ海軍軍人

1853 (嘉永 6) 年、艦隊を率いて浦賀へ入港し開港を要求。『ペリリ提督日本遠征記』

タウンゼント・ハリス（1804～1878）アメリカの商人・外交官 民主党員

1856（安政3）年、ヒュースケンを通弁官として伴い来日。初代駐日アメリカ弁理公使
下田奉行に「あなた方は、地上における最大の嘘つきだ」 『日本滞在記』

ヘンリー・ヒュースケン（1832～1861）オランダ生まれ、のちアメリカ国籍取得。

1856（安政3）年、ハリスと共に来日。駐日アメリカ総領事館の通弁官。

1861（文久1）年、攘夷派により暗殺され来日6年目28歳で没。ハリスは泣き崩れた。
『ヒュースケン日本日記』

ロバート・フォーチュン（1812～1880）スコットランドの商人・プラントハンター

1858（安政5）年、日本の開港を聞き中国から長崎へ。1860年横浜。1861年再来日
シーボルト訪問。日本庶民の花好きは文化的レベルの高さ。『幕末日本探訪記』

ラザフォード・オールコック（1809～1897）イギリスの医師・外交官

1859（安政5）年、清国から、初代駐日総領事・同公使として来日。1860（万延1）年、
外国人初の富士登山。翌年、長崎からあえて陸路で江戸へ。英公使館の置かれた高輪東
禅寺で「夷狄に神州日本が穢された」とする攘夷派の水戸浪士14名に夜襲される。自
身は難を免れたが、オリファント書記官や在長崎領事モリソンらが負傷（第1次東禅寺
事件）。日本人と中国人の比較など。『大君の都 幕末日本滞在記』

チャールズ・ワグマン（1832～1891）イギリスの画家・漫画家・ジャーナリスト

1861（文久1）年、長崎へオールコックと共に江戸へ。第1次東禅寺事件の惨状の描画
を10月、ロンドンの新聞に掲載。日本最初の漫画雑誌『ジャパン・パンチ』発行。

アーネスト・サトウ（1843～1929）イギリスの外交官

1862（文久1）年～1883（明治16）年、滞日。通訳から公使へ。蝦夷地へも。
『一外交官の見た明治維新』『遠い崖』

ハインリッヒ・シュリーマン（1822～1890）ドイツの実業家・考古学者

1865（慶応1）年訪日。その後、フランス大学、ギリシャを経てトロイ発掘。
「シュリーマン旅行記 清国・日本」

エルヴィン・フォン・ベルツ（1849～1913）ドイツの医師

1876（明治9）年、お雇い外国人の一人として来日。27年間医学を教えた。
公平で優れた日本評 『ベルツの日記』

エドワード・シルヴェスター・モース（1838～1925）アメリカの動物学者・考古学者

1877（明治10）年初来日、1883（明治16）年帰国。 『日本その日その日』

イザベラ・バード（1831～1904）イギリスの旅行家 1878（明治11）年6月～9月 伊藤
鶴吉を伴い日光～会津～新潟～北海道 『イザベラ・バードの日本紀行』

ルース・ベネディクト（1887～1948）アメリカの文化人類学者 文化相対主義、文化の型
（パターン） 来日の経験ないが、日系移民との交流と日本に関する文献の熟読で日本
人の行動パターンを分析。恥の文化と罪の文化、集団主義、恩と義理 「アメリカ式の
デモクラシーを世界に押し付けるな」『菊と刀』（1946）

3 欧米人たちは日本人に何を見、どう感じたか？

欧米人たちが、それまでヨーロッパではほとんど未知だった日本を訪れ始めたのは、ちょうど戦国時代のことだった。300年近くもの間、断続的に続く殺伐たるこの時代の日本を最初に訪れたのは、強烈な布教の意思を持ったスペイン・ポルトガルなどのキリスト教宣教師たちだった。ザビエルの「これほどまでに武器を尊重する国民に未だかつて会ったことがない」との印象も、まさにこの時代の日本だからこそであろう。

これに対し、その後200年以上にわたって大きな戦乱もなく平和が続き、国内が安定していた江戸時代、幕府は国民の国外渡航を固く禁じ、例外はあれ建前上は厳しい鎖国政策を取り、またキリスト教を徹底的に弾圧した。その間、日本独特の文化が開花し爛熟した。

トゥーンベリやカロンらが驚異、好奇の目で報告する「お歯黒」や「煙管」あるいは「殉死」や「磔」といった風習も、まさにそうして独自に発達した文化だったからこそ、奇異なるものとして彼ら異邦人の目に止まり、記録させたのに相違ない。日本人の、裸体や性に対する大らかさや男色については古くから注目されていたが、遊女などの性文化、吉原など作法としきたりに彩られた独特の売春システム、それに木造家屋ゆえの火事の被害などについてもしばしば言及されている。

19世紀になると、ロシア、イギリス、アメリカといった列強の艦船が日本沿岸に頻繁に出現し始め、1854（嘉永7）年、艦隊を率いたペリーの要求に、日本はついに国を開いた。

こうして幕末に日本を訪れた外国人には、江戸時代のようにオランダ人ばかりでなく、当然、ロシア、イギリス、アメリカなどの外交官が多くなる。ヒュースケンが驚嘆したように、彼らは一様に、日本人が質素でありながら行儀がよく（自粛・忖度？）、清潔（手洗い・嗽・マスク？）で、洗練された美意識を持つこと、一方で異常なまでの好奇心に満ち溢れていることなどをよく記録している。ただ、こうした日本人の「美德」が、長い間の幕府の統制、上下関係、身分秩序、厳しい刑罰制度などと表裏一体なのでは、と感じ始めてもいる。また、初等教育の高さを評価し、やがて欧米先進国のライバルになるのではとも予感する一方、こんな素朴で朗らかで幸せそうな、精神的に豊かな人々を現実的な国際社会の渦に巻きこむことが、果たして良いことなのか、と逆に悩んだりもしている。

明治維新後、しだいに国内が落ち着いてくると、「お雇い外国人」をはじめ、欧米の進んだ科学の成果を携えて各分野の学者、研究者、旅行者、建築家、芸術家なども訪れるようになり、持ち前の客観的で冷静な観察眼で、急速に近代国家の仲間入りを急ぐ日本人を、時には鋭く時には暖かい眼差しで見つめる。

やがて大正・昭和初期を経て日本が欧米に追い付き追い越そうとした時、ついに日本はアジア太平洋戦争の道を選ぶ。そして無条件降伏。連合国軍最高司令官として日本に降り立ったマッカーサーの優越感に満ちた言葉はさておき、じつは日本には一度も来たことのないR.ベネディクトの日本人論を読む時、相手（敵国）に対するかくも冷静で客観的な観察と分析の力こそ、軍事力以上に、じつは勝敗を分けた要因だったように思われ、その意味でも、21世紀の今日なお、私たちが吟味する価値のある言説といってよいと、私は思っている。